

筑後国分寺跡（Ⅱ）

昭和53・54年度発掘調査概報

久留米市文化財調査報告書

第 24 集

1 9 8 0

久留米市教育委員会

筑後国分寺跡（Ⅱ）

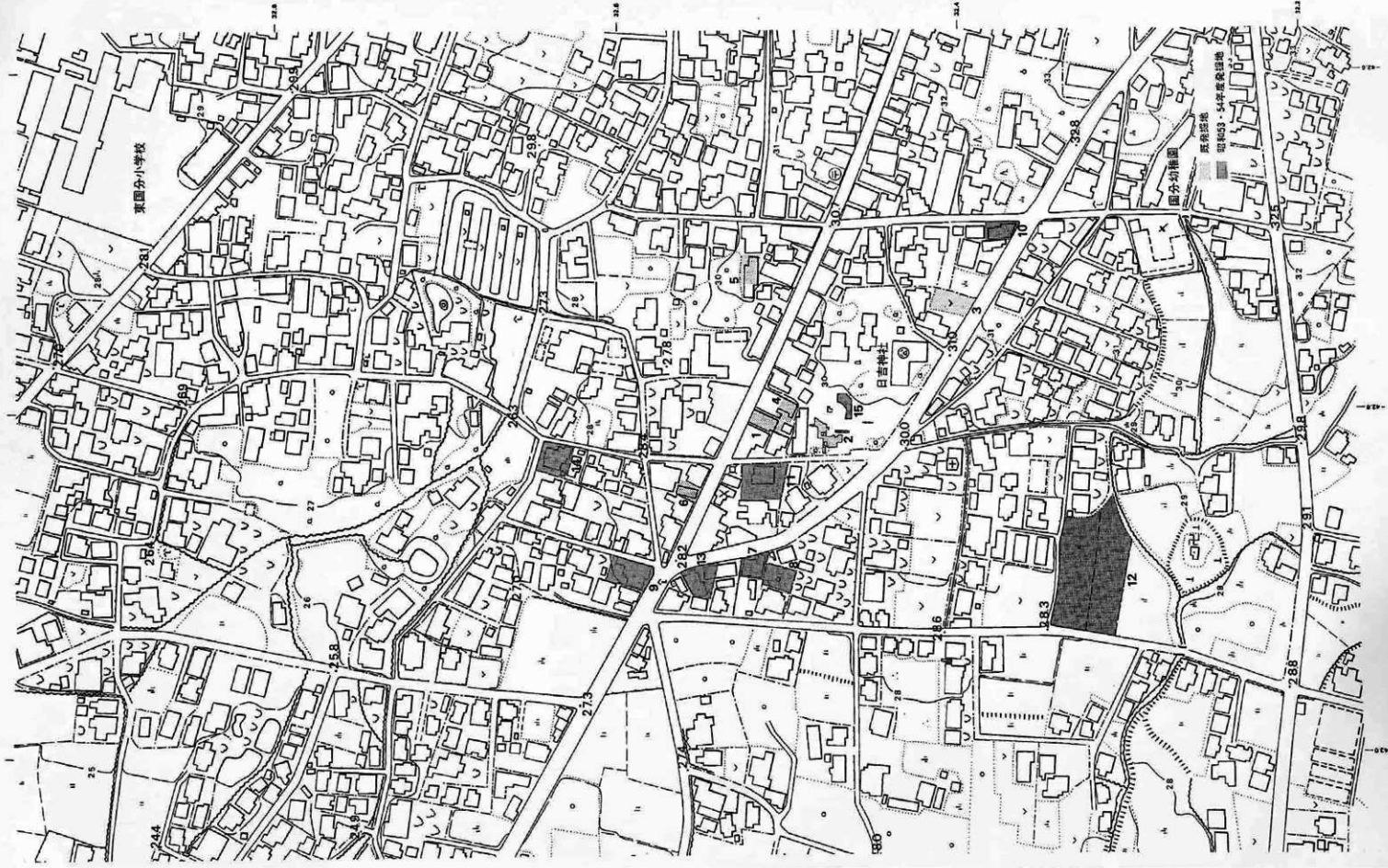
昭和53・54年度発掘調査概報

例 言

- 1 本書は、昭和53・54年度に久留米市教育委員会が実施した、久留米市国分町所在の筑後国分寺跡の発掘調査概要の報告である。
- 2 発掘調査は文化財担当櫻井康治・松村一良が担当し、調査補助員として山口淳、平塚あけみ、藤田美佐子が参加した。
- 3 掲載の実測図の作成は、櫻井、平塚、藤田が行い、製図、写真撮影は全て櫻井が行った。
- 4 本概報から、これまで使用した地点を次数に変更し、検出遺構を統一して表記することにした。それぞれの調査次数は第1表のとおりである。
- 5 本書の遺構表示は、下記の略記号に拠る。
 SA—築地・堀・欄 SB—建物 SD—溝・濠 SE—井戸
 SF—道路 SK—土城 SX—その他の遺構
- 6 本書の執筆・編集は、櫻井が担当した。

目 次

I 調査経過	1
II 第7次調査	2
III 第8次調査	3
IV 第9次調査	6
V 第10次調査	8
VI 第11次調査	10
VII 第12・13次調査	15
VIII 第14次調査	15
IX 第15次調査	17
X 小 結	19
XI 基準点設置	20



I 調 査 経 過

筑後国分寺跡は、昭和52年度の発掘調査の成果に基づき、筑後国分僧寺の規模、伽藍配置が筑前国分僧寺のそれと同一のものではないかと云う推定を行った。今後の発掘調査は、これらの推定及び従来の寺域2町説を考慮しながら調査を実施することにした。

昭和53・54年度の発掘調査は9次を数え、そのうち確認調査は3次に過ぎないが、新改築に伴う緊急調査においても、第10・11次は重要な成果をもたらした。

また、昭和54年度に国土調査法第II座標系の基準点を設置し、これに基づいて各次調査の遺構実測図の作成にあたることにした。

発掘調査の実施にあたり、東国分公民館ならびに各土地所有者、発掘作業に携わられた高良内、御井町の各位には、多大の御協力と御理解をいただき、付記して深く謝意を表わしたい。

年度	調査回数	調 査 地	調査面積
52	1	国分町字谷706-4	56 m ²
	2	国分町字谷711-1	300
	3	国分町字宮ノ脇743-16	10
	4	国分町字谷706-7	30
	5	国分町字谷671-1	34
	6	国分町字大木下719-22	30
53	7	国分町字大木下717	46
	8	国分町字大木下715-1	80
	9	国分町字馬場田1201-5	52
	10	国分町字宮ノ脇745-8	28
	11	国分町字谷718-1	130
	12	国分町字政所729-1、字白川782-1	188
54	13	国分町字大木下719-5	42
	14	国分町字馬場田1206	15
	15	国分町字谷711-1	72

第1表 筑後国分寺跡発掘調査一覧表

Ⅱ 第 7 次 調 査

1 調 査 の 経 過

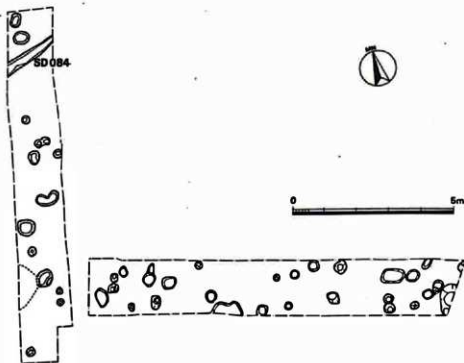
店舗兼住宅の建築による事前の調査である。対象地は、寺域を2町域とした場合、寺域の北を限る遺構の存在が考えられるので、南北方向のトレンチを設定した。さらに東西方向のトレンチも設定した。調査の結果、南北トレンチから東西方向の小溝およびピットを検出した。地番は、国分町大木下717番地である。

2 検 出 遺 構

検出した遺構は、溝1とピット多数である。

SD 084 幅0.2 m～0.4 m、深さ約0.18 mを測る溝である。南北トレンチの北端で検出した溝である。北、西側は対象地外になるため、詳細を究明するには困難であった。国分寺と関連する遺構としては考えがたい。

ピットの規模は、大きささまざまであり、深さも約30 cm～10 cm程度の遺構である。これらのピットで建物や棚列としてまとめるのは不可能である。



第2図 第7次調査遺構配置図

3 出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、土師器、黒曜石、サヌカイトの小破片のみであった。SD 084 出土遺物は、縄文土器、土師器の杯口縁部、サヌカイトの破片で、縄文土器が多数を占める。ビット出土遺物は、縄文土器のみ出土する遺構と縄文土器、土師器を混合して出土する遺構とに分かれる。

Ⅲ 第 8 次 調 査

1 調査の経過

第 8 次調査は、寺城北を限る遺構の存在を確認する発掘調査である。第 7 次調査の検出状況や遺物からみて、寺域の外側の可能性が強いと考え、寺域の南北を縮小した位置で隣接地の発掘調査を実施した。調査は、対象地に東西・南北方向の十字トレンチを設定した。トレンチ調査の結果、表土下約 30cm～40cm は、黒褐色粘質土層で、非常に堅固に締った整地層が確認され土師器、須恵器、陶磁器、瓦等を包含していた。さらに黒褐色粘質土層を発掘した結果、南北トレンチにおいて東西方向の溝 2 条を検出した。以後、溝の部分の全面発掘調査を実施した。地番は国分町字大木下 715 番地の 1 である。

2 検出遺構

全面調査を実施した結果、平行する溝 2、土坑 4、ビット多数を検出した。

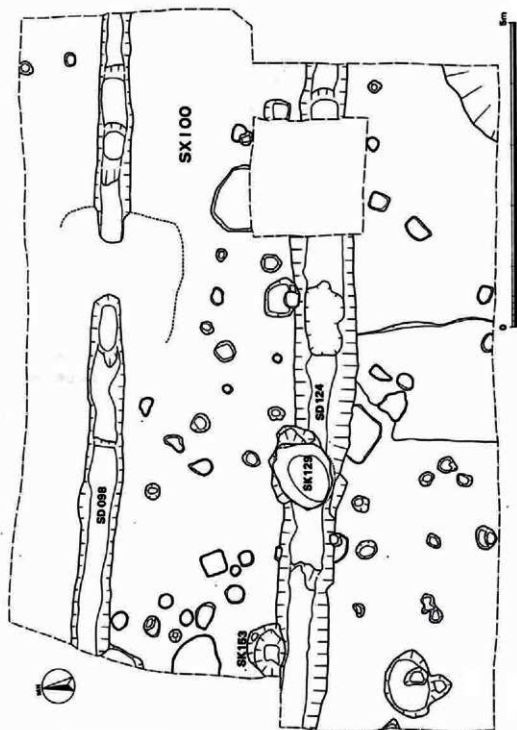
SD 098 平行する溝の北側の遺物であり、検出した中央部は新しく攪乱を受けている。幅は、約 0.65m～0.45m、深さ 23～13cm を測る。底面は、一方に傾きを示しているのではなく、段落ちを有したり、土坑状の落込みを有したりしている。

SD 124 SD 098 の南側に平行して走向する溝である。幅約 1.1 m～0.7 m、深さ約 20cm～10cm を測る。底面は、SD 098 と同様に一定ではない。

SK 153 発掘区の西端中央に位置し、SD 124 を切っている。規模は、長径約 0.85m、短径 0.65m、深さ約 0.3 m を測る。

SK 154 規模は、長径約 1.1 m、短径約 0.8 m、深さ約 10cm を測る。不整形の土坑であり底面の一部に深さ約 10cm のビットを検出した。

SK 104 南側が未発掘部分になるため、規模の詳細は不明であるが、検出部分のみでは長径約 1.1 m、短径約 0.65m、深さ約 8 cm を測る浅い土坑である。出土遺物から縄文期に比定される。



第3圖 第8次調査遺構配置図

SK 129 発掘区の中央部で検出された。SD 124 より新しい土壇である。規模は 長径約 2.4 m、短径約 1.8 m、深さ約 1.4 m を測る。底面は、摺鉢状になっており、底面より約 35cm 上で最大径を示している。

その他、ビット多数が検出されたが、最も深い遺構で約 10cm 程度である。

3 出土遺物

出土した遺物は、土師器、須恵器、青磁、土鍋、瓦器、瓦などで各遺構からは少量出土した。築地層中の遺物は今回は省略する。概観すると中世に下限を比定される。

SD 098 出土遺物 (第 4 図)

土師器 (1)

口径 13.3cm、高さ 3.4 cm を測る杯である。器形は、匱切りされた底部に、やや外反する体部を有している。ほかに高杯の脚部片や糸切り小皿、甕の破片などが出土している。

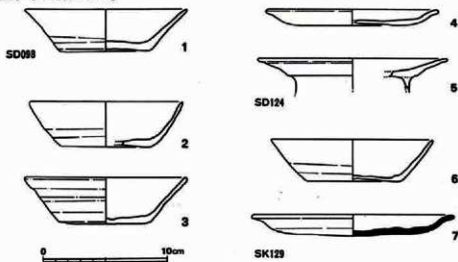
そのほかの出土遺物は、須恵器、青磁、瓦等が発見されたが、いずれも破片にすぎない。

SD 124 出土遺物 (第 4 図)

土師器 (2-5)

杯は口径 12.4cm-13.2cm 高さ約 3.6 cm を測る。底部はいずれも匱切りされているが、体部は、2 が内湾気味に、また 3 は直線的に外に広がっている。皿 4 は口径 13.8cm、高さ 1.3 cm を測る。底部はやや上げ底で、体部と底部の境は明瞭でなく、口縁部は外側に広げている。高台付皿 5 は、口径 15.2cm、現存高 2.7 cm を測る。

そのほかの出土遺物は、須恵器 (高台付碗)・瓦器 (碗)・平瓦 (縄目文・正格子)・丸瓦 (玉縁) 等が発見された。



第 4 図 第 8 次調査出土遺物

SK 104 出土遺物

縄文土器片のみで覆ないし鉢等の破片である。

SK 129 出土遺物 (第4図)

土師器

杯(6) 口径13cm、高さ3.2cmを測る。寛切りされた底部はやや上げ底で、体部は底部から直線的に外側へ開いている。

須恵器

皿(7) 口径16.2cm、高さ1.7cmを測る。器形はやや丸味のある底部を有し、底部と体部の境は不明瞭で、口縁部は大きく反する。

その他高台付杯や壺の口縁部の破片が出土した。

瓦は破片で、縄目文・格子目文の平瓦、および丸瓦の玉縁部が発見された。

SK 153 出土遺物

杯は、口径13.3cm高さ4cmを測る。器形は寛切りされた底部に、底部から直線的に外に開いた体部を有している。ほかにふいこの羽口が出土している。外径6.3～4.5cm、孔径2.7～2.4cm、現存長約10cmを測る。装着部分であり、先端がスラグ状になっている。

Ⅳ 第9次調査

1 調査の経過

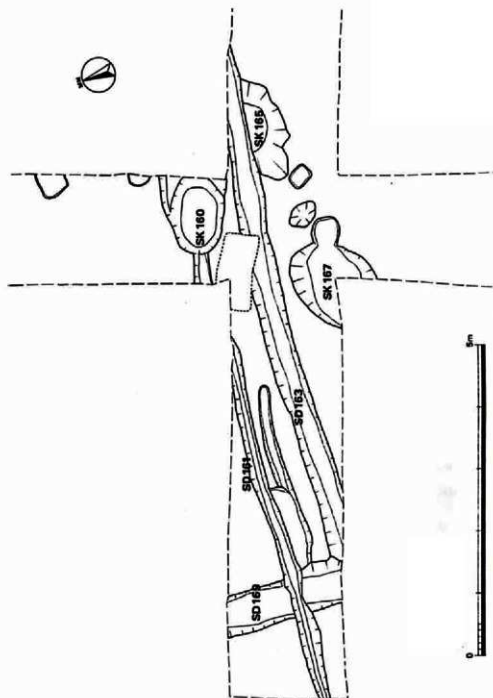
店舗兼住宅の建築に先立つ緊急調査である。対象地は、推定寺域外に位置しているが、寺域と周辺条里との関連性を捉えるために調査を実施した。調査は、対象地の中央に十字トレンチを設定し発掘を行なった。調査の結果、当該地は旧水田地で現在の高さより約0.8m低い面で耕作を行っていた。耕作土下約20cmで地山に達し、遺構の検出を行なった。検出した遺構は溝4、土壇3、そのほかピット4である。地番は国分町字馬場田1201番地の5である。

2 検出遺構

遺構は南北方向の溝1、東西方向の溝3、土壇3、ピット4を検出した。

SD 161 幅35cm～23cm、深さ12cm～14cmを測る。SD 169やSK 160と切合っているが、SD 169より新しい。SK 160とは埋土がほぼ同じであるため、新旧どちらとも決め難い。

SD 163 幅45cm～35cm、深さ約17cmを測る。北側のSD 161と平行に走る。SK 164を切っているが、SD 169との関係は確認できなかった。SD 169はSD 161・163とはほぼ直交し、また底面の幅がかなり広い溝である。幅70cm～65cm、深さ約13cmを測る。



第5圖 第9次調査遺構配置圖

SK 160 東側は、未発掘区であるため詳細は不明であるが、現存の規模は、長径1.3 m、短径1 m、深さ約39cmを測る。東側に段を有するので、長径はさらに長くなるとされる。底面は摺鉢状を呈する。

SK 164 北側をSD 163によって切られているため、詳細は不明である。現存規模は、長径1.75m、短径0.65m、深さ約10cmを測る。底面は摺鉢状を呈する。

SK 167 西南部が未発掘であり詳細は不明である。現存規模は、長径1.8 m、短径1.4 m、深さ10cmを測る。底面は摺鉢状を呈した、平面不整形の土壇である。そのほかの遺構についての説明は今回は省略する。

3 出土遺物

遺構からの出土遺物は破片が多く土師器がほとんどを占め、そのほか須恵器、瓦等が発見された。SD 161 から須恵器高杯が出土した。

V 第10次調査

1 調査の経過

店舗兼住宅の建築に先がけて、緊急調査を実施した。対象地は、推定寺域の東を限る遺構の存在が考えられるので、その検出を主な目的とした。まず北側、南側に東西方向のトレンチを2本平行に設定して発掘調査を行った。調査の結果、第1層は表土、第2層は水田の耕作土であり、第9次調査同様、現高より約40cm下で耕作を行っていた。第3層は暗褐色粘質土層であり、遺物の包含がみられる。第3層直下は地山であり、この面で遺構の確認ができた。検出した遺構は、溝2、土壇1である。地番は国分町字宮ノ脇745番地の8である。

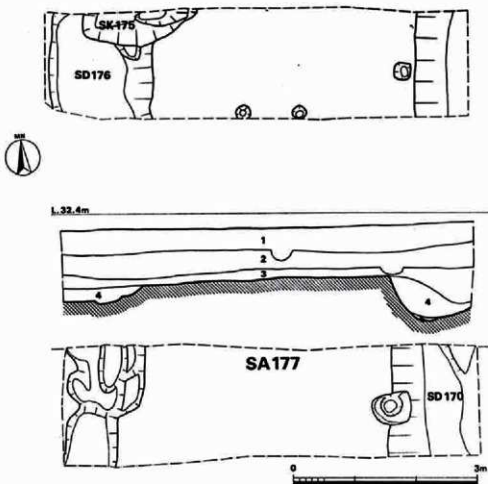
2 検出遺構

遺構は、南北に平行して走向する溝2と、土壇1である。

SD 170 東側が未発掘区であるため、幅が不明である。深さは、地山面より約65cmを測る。第4層は黒褐色粘質土層で、遺物をかなり包含していた。第5層は掘り上げて直ちに埋め戻している。

SD 176 SD 170の南側に平行している溝である。幅は1.65～0.9 m、深さ11～5cmの浅い遺構である。SD 170に比べるとかなり複雑な様相を呈している。

SK 175 北側は未発掘のため、詳細は不明であるが検出した部分は、長径1.9 m、短径0.5 m、深さ約0.6 mを測る。SD 176との切り合い関係は、埋土がほとんど同一で、判断が困



第6図 第10次調査遺構配置図

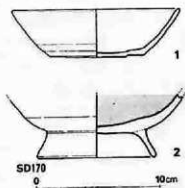
難であった。今後出土遺物を十分に検討する必要がある。

SA 177 SD170とSD 176の2条の溝を雨落溝とすると、南北に延びる遺構で、すでに削平を受けている。SD 170とSD 176の中心距離は約6 m、内法は約4.5 mを測る。今回の調査では、構造が築地または堀とする積極的な決め手はないが、僧寺寺域の東限を画する遺構には違いはないと考える。

3 出土遺物

遺物は、土師器、須恵器、磁器、瓦等が発見されたが、土師器が多くを占める。いずれも破片ばかりで、復元しうるものは数点のみである。

SD 170 出土遺物 (第7図)



第7図 第10次調査出土遺物

土師器(1・2) 1は口径13.6cm、高さ3.9cmを測る杯である。器形は椗切りされた底部と、直線的に広がる体部を有しているが、体部はやや内湾気味にある。2は内黒高台付椗で口縁部が欠損しているが、現存高は5cmを測る。椗部は、丸味のある底部に内湾する体部を有するものと思われる。高台は、高さ2cmを測る。直線的に広がった端部は九く仕上っている。

そのほか須恵器、白磁、瓦、黑色土器等の破片が見された。

SK 175 出土遺物

土師器、瓦の破片である。

VI 第11次調査

1 調査の経過

個人の専用住宅建築に先立って実施した緊急調査である。対象地は、講堂跡の北西約50mにあり、僧房跡および寺域の北を限る遺構の存在が考えられたので、それを調査の目的とした。調査はまず、南北トレンチを2本設定し、発掘調査を実施した。調査の結果表土下第2層は、第8次調査において見られたと同様な、遺物を包含し堅固に締った整地層が確認された。整地層は、北に厚く南では薄い状態を示していた。遺構は、整地層下地山面において検出された。各トレンチの北において、遺物を多量に埋蔵した2条の溝を検出した。発掘調査は溝を中心に全面調査を実施することとした。地番は、国分町字谷718番地の1である。

2 検出遺構

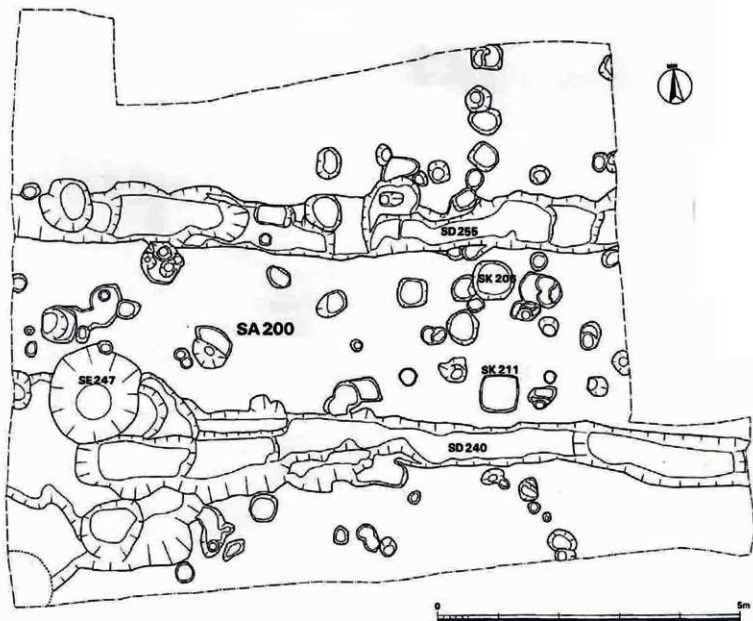
検出した遺構は、溝2、井戸1、土壇2、ピット多数である。

SD 240 幅0.85m～0.65m、深さ37cm～20cmを測る。底面は一定でなく、段落ち各所に見られる。西側は、多くの土壇状遺構や井戸によって攪乱を受けている。

SD 255 幅1.0m～0.8m深さ30cm～5cmを測る。底面は一定でなく、おうとつが各所に見られる。すでに削平を受けているため、立ち上りが検出されない部分もあった。

SK 206 径65cm～60cm、深さ約15cmを測るほぼ円形の土壇である。完形の土師器(杯)が1点出土した。

SK 211 長さ約60cm、深さ約20cmを測る隅丸方形の土壇である。完形の土師器(杯)が3



第 8 図 第11次調査遺構配置図

瓦片1が発見された。SK 206・211の埋土は、暗褐色土を呈しており、柱痕も確かめられなかった。

SE 247 直径1.6m～1.45m、深さ1.7mを測る。SD 240より新しい。

SA 200 SD 240とSD 255の2条の溝を雨落溝とする。築地跡または堀跡と考えられる。両溝の中心距離は約3.6m、内法約2.7mを測る。両溝にはさまれた空間において、柱穴は多く検出されたが、一定の法則を持って並ぶ遺構は発見されなかった。第10次調査で検出された遺構と規模が異なるが、今回検出された遺構は、筑後国分僧寺域の北を限るものと考ええる。

3 出土遺物

出土した遺物は、土師器が主体を占め、須恵器、陶磁器、瓦等である。今回は竪地層中より発見された遺物は省略するが、概観すると中世下限を比定できるものと思われる。

SD 240出土遺物 (第9・10図)

土師器 (1～10)

杯(1・2) 1は、口径12.4cm、高さ3.4cmを測る。2は、口径14cm、高さ3.8cmを測る。器形は、篋切りされた底部に、内湾気味の体部を有する。1は口縁部を若干つまみ出している。

高台付碗(3～7) 口径17.1cm～14.5cm、高さ6.7cm～5.8cmを測る。3～5は篋切りされた底部にはほぼ直線的に広がる体部を有する。3は、体部と底部の境を2条の沈線によって、高台部分を作り出している。3、4は貼付高台である。6、7は、体部を欠損し、底部と高台部分である。6の高台は、細くすらりと立ち上がり、端部は外へ張り出し、削り出しの面を有する。高台と云うより脚の様相を呈する。7は、端部を丸く仕上げた、肉太い高台である。

皿(8) 口径14.2cm、高さ2.3cmを測る。底部は篋切りされており、直線的に広がる体部との境に、若干稜を有する。

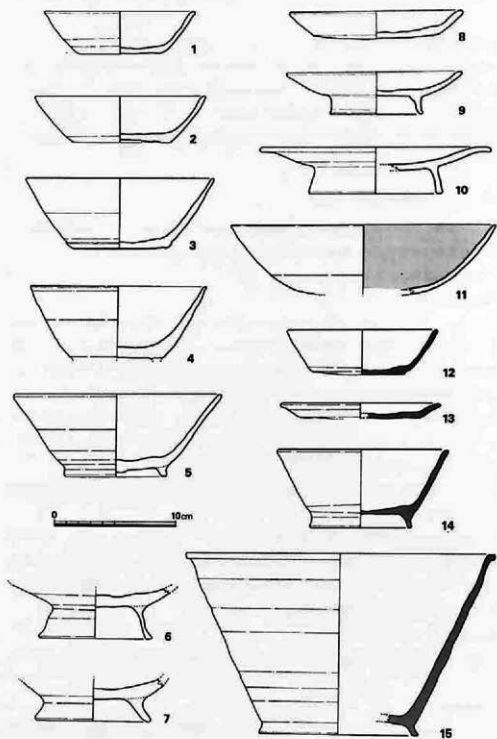
高台付皿(9・10) 口径18.9cm～14.3cm、高さ3.9cm～3.5cmを測る。皿部は、底部と体部の境は不明瞭である。10の口縁部は、長く水平につまみ出している。高台部は、9は垂直に立ち上がり、端部をつまみ出している。また10は、内湾気味に立ち上がり、端部は削り出し面を有する。高台径10.9cm～7.7cmを測る。

内黒土器

碗(11) 口径21.7cm、現存高5.7cmを測る。内面を磨きしているが、大まかなものである。

須恵器 (12～15)

杯(12) 口径12.3cm、高さ3.7cmを測る。器形は、篋切りの底部に、直線的な体部を有する。



第9圖 第11次調査出土遺物

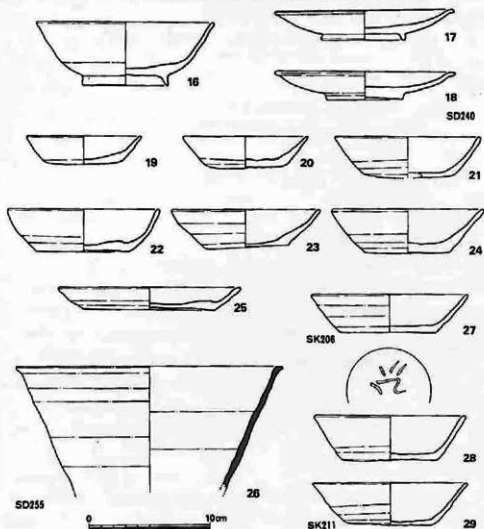
皿 (13) 口径13cm、高さ1.3cmを測る。器形は、篋切りされた平坦な底部に、外反する体部を有する。

高台付碗 (14・15) 口径25cm～13.8cm、高さ14.2cm～6.3cmを測る。15は、口縁端部をつまみ出し、上面に削り出し面を有する。また高台部においても削り出し面を有している。

陶磁器 (16～18)

高台付碗 (16) 口径14.8cm、高さ5.3cmを測る緑釉陶器である。保存状態は悪く、釉は部分的に残っている。

高台付皿 (17・18) 口径15cm、高さ2.4cmを測る。17は緑釉陶器であり、保存状態はひどいように良い。18は、円盤状高台が貼付けられており、高台底面内側に沈線を有している。器壁



第10図 第11次調査出土遺物

は、地肌があらわれ釉がかけられたものかどうかは不明である。

瓦 類 (第11図)

軒平瓦 (1) 瓦当部の半分と、平瓦の一部が遺ったものである。瓦当面には、均整唐草文が陽刻され、外区が特に突出している。文様はかなり簡略化したものと思われる。外区及び、脇区に珠文をめぐらしている。瓦当部の厚さは5.3 cmを測り、段頸を有する。焼成は良く硬質である。顎面及び平瓦凸面に縄目文を有する。

SD 255 出土遺物 (第10図)

土師器 (19-25)

杯 (19-24) 口径12.7 cm～9.5 cm、高さ3.7 cm～2.4 cmを測る。底部は寛切りされている。22の口縁部には油煙が付着している。

皿 (25) 口径15.2 cm、高さ1.9 cmを測る。器形は、寛切りされた底部に、短く直線的な体部を有する。

須恵器

高台付碗 (26) 底部を欠損しており、高さは不明であるが、SD 240 出土のものと同じであろう。口径は22.2 cmを測る。口縁部上面に削り出し面を有している。

瓦 類 (第11図)

軒平瓦 (2・3) 2は瓦当部と平瓦の一部が遺ったものである。瓦当面には、偏行唐草文が陽刻され、文様の周囲に珠文を配する。上外区はなく、下外区と内区との境に界線で区画し文様は見られない。瓦当部の厚さは5.2 cm、段頸を有する。顎面及び平瓦凸面に縄目文を有する。3は、瓦当面に均整唐草文が陽刻されている。下外区・脇区は欠損しているが、上外区に珠文を有する。瓦当部の厚さは6.7 cm、段頸を有する顎面及び平瓦凸面には、正格子の叩き目を有する。

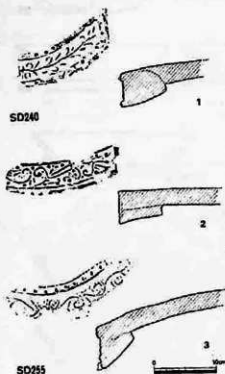
SK 206 出土遺物 (第10図)

土師器

杯 (27) 口径12.8 cm、高さ3.1 cmを測る。口縁部は油煙の付着が見られる。

SK 211 出土遺物 (第10図)

土師器



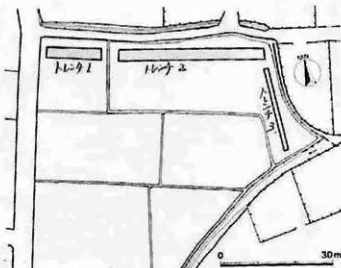
第11図 第11次調査出土遺物

杯(28・29) 口径12.9cm～12.7cm、高さ3.8cm～3.5cmを測る。28はやや肉太く見込みに
 瓦書き文字がみられる。

Ⅶ 第12・13次調査

Ⅰ 調査の経過

第12次調査は、寺域の南
 限及び西限を確認する目的
 で発掘調査を実施した。対
 象地は水田であり、道路を
 挟んだ北側の植木畑と1m
 以上下がっている。発掘調
 査は、東西方向のトレンチ
 および南北方向のトレンチ
 を設定した。調査の結果、
 耕作土下は床土並びに砂礫
 層であった。国分寺に関す
 る遺構は全く検出されず、
 床土より土師器、瓦、青磁



第12図 第12次調査地周辺図

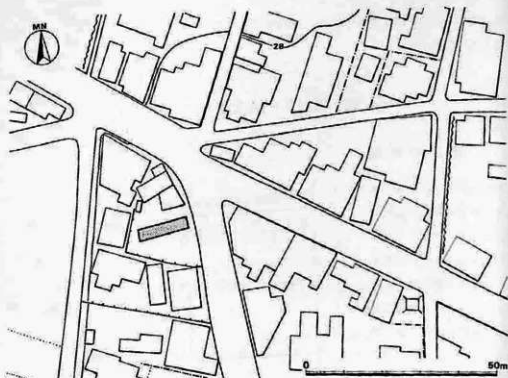
等の破片が少量発見された。今回の調査において、筑後国分寺の寺域は、当該地まで及んでい
 ないと思われる。地番は、国分町字政所729番地の1並びに同町字白川782番地の1である。

第13次調査は、店舗建築に先立つ緊急調査である。対象地は、寺域推定域外になるが周辺条
 里との関連を促えるため、トレンチ調査を実施した。調査の結果、当該地は旧本田地であり、地
 山面にも遺構は検出されなかった。地番は、国分町字大木下719番地の5である。

Ⅷ 第14次調査

Ⅰ 調査の経過

個人住宅の建築による緊急調査である。対象地は、昭和39年に九州大学考古学教室により、
 発掘調査された瓦窯跡から東へ約120mはなれた位置にある。発掘調査は、瓦窯跡の確認を目
 的として実施した。調査の結果、土壇2を検出したのみであった。また現在水系とは田海苔田



第13図 第13次調査地周辺図



第14図 第14次調査地周辺図

を挟んで北へ約30m離れているが、地形的に旧状を残していると思われていたが、北、南の地山の高低差が少ないところから、対象地は、台地上の鞍部に位置するものと考ええる。地番は、国分町字馬場田1206番地である。

2 検出遺構

土壇が、2基検出されたが完掘していないので詳細は不明である。

SK 260 長さ約4.5 m、深さ約30cmを測る。南側の立ち上がりは緩やかな傾斜であるが、北側は、湾曲して垂直に立ち上がっている。埋土は、暗褐色土であり、第8・11次調査で見られる整地層と同様に堅く締った状態であった。

3 出土遺物

SK 260 出土遺物

土師器、青磁、瓦の破片が出土した。

IX 第15次調査

1 調査の経過

今回の調査は、第2次調査において検出できなかった講堂基壇の縁辺を南側で検出する目的で発掘調査を実施した。調査は、神社境内であるため、種々の制約を受け、調査範囲を広げることが困難であった。地番は国分町字谷711番地の1である。

2 検出遺構

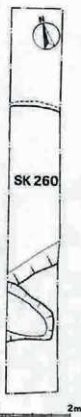
SB 035 (講堂跡) 遺構は、最初の期待に反して保存が悪く、辛うじて講堂の東南隅の礎石根石が遺っており、基壇の縁辺部は完全に消滅していた。しかし区域の西側の側平面において掘込地業の南側の端が平面的に促えられた。さらに地業内および基壇の状態を見るために、東西トレンチ、南北トレンチを2本ずつ設定した。トレンチ調査の結果、地業の東側の立ち上がり部分は、攪乱を受け、大体の位置を推定するにすぎない。第2次調査で検出された地業の北端から測ると南北の長さは、約21mを呈する。基壇は、地業内部の構築の過程で、大量の川原石を混えて版築しており、川原石の中には瓦も含まれていた。

SB 270 基壇版築の状態を知るために設定した。発掘区域西側の南北トレンチで検出された。遺構は、南北に並んだ掘立柱跡2基のみである。柱穴は、隅丸方形を呈し約30cmの柱痕を遺している。柱痕の周囲は版築されている。この2基の掘立柱の消滅後に講堂基壇の構築が行われている。

3 出土遺物

遺物は、瓦がほとんどで、土器や陶磁器は少量発見された。遺物のほとんどは、攪乱土中より発見されている。基壇植土中からは、若干の瓦が発見された。

SD 035 出土遺物



第15図 第14次調査
遺構配置図

第 2 次調査

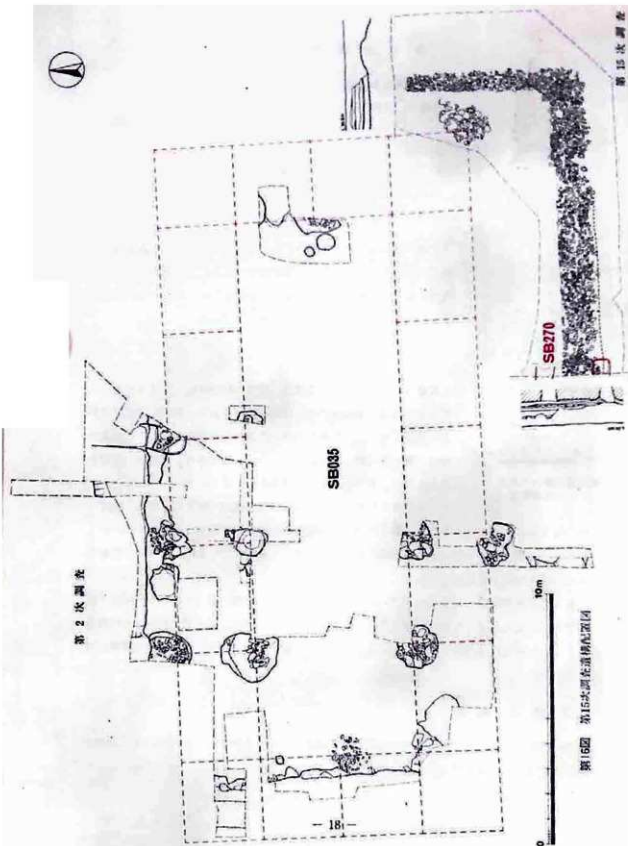
SB035

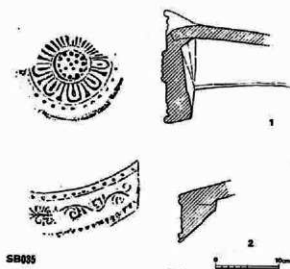
SB270

第 15 次調査

第 16 図 第 15 次調査遺構配置図

10m





第17図 第15次調査出土遺物

瓦類 (第17図)

軒九瓦(1) 掘乱土中から発見されたものである。瓦当面は、単弁九弁蓮華文様で、中房と外区外縁が特に突出している。外区内縁は、珠文が11個遺っているが、復元すると27個あると考えられる。瓦当径約17.8cmを復元できる。内区中房径—6.1cm、蓮子1+4+12、弁区幅3.3cm、外区内縁幅1.6cm、外区外縁幅1.2cm茶褐色を呈し若干摩耗している。

軒平瓦(2) 基壇積土中より

発見されたもので、瓦当部が半分遺ったものである。瓦当面には、均整磨草文が陽刻され、外区が特に突出している。上外区に珠文9、下外区に凸鋸歯文14が遺っている。瓦当部の厚さは7.1cm、段頸茶褐色を呈し、摩耗がひどい。そのほか鬘斗瓦・平瓦・丸瓦等が発見されている。

X 小 結

昭和53・54年度に実施した、発掘調査の成果を概略述べてきた。これらの成果をまとめると以下の如くなる。

講堂は第15次調査に於いて、基壇の規模を捉えることは、縁辺部が削平されていることで、不可能であった。しかし掘込地業の南側及び、東側を確認することができた。地業の南縁線に沿って前回推定した講堂をあてはめると(第16図)、地業内でも北よりに建物が建てられていることが判明した。今回の調査で、講堂基壇下に掘立柱建物跡が存在することが確認された。トレンチ内に掘立柱遺構が2基検出されただけで、詳細を捉えることは困難であるが、今後、掘立柱建物跡について、十分検討せねばならない。

寺域については、SA 177・SA 200で、ほぼ東限・北限を限ることができたが、構造上の問題については、今後さらに検討しなくてはならないと思う。南限は第12次調査地までは及んでなく、地形的に北よりの位置と考える。因みに、SA 200から第12次調査地北の段落ちまで約180m、講堂の中軸から、SA 177までは約115mを測る。さらに、SX 100は、10m程度の検出にすぎないが、中軸線が、SA 200のそれに比べて、東側が南方向に寄っており、S

A 200 とは別の遺構ではないかと考え周辺条里との関係を検討してみた。その結果、筑後国分寺跡(1)において、推定した条里線の「字一ノ江」から、1町南の条界線と一致するのは偶然であろうか。

遺物については、本紙報に掲載したのはごく一部であり、十分に時間を於いて検討したい。

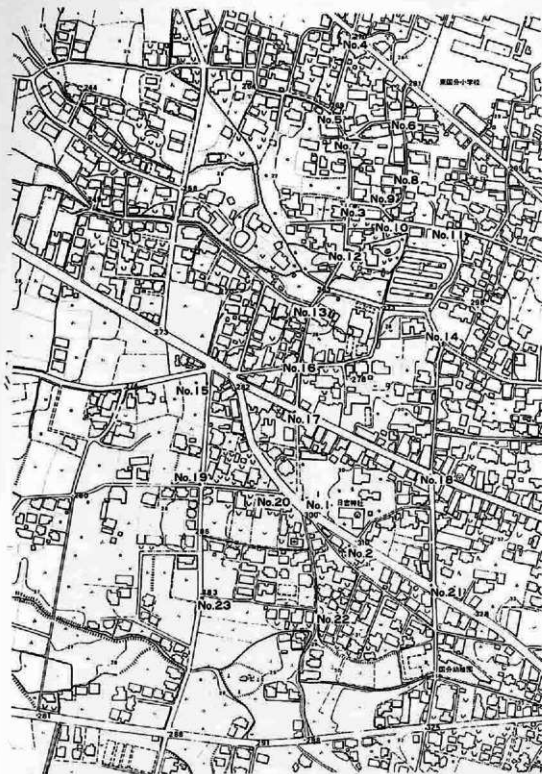
XI 基準点設置

昭和54年度に於いて、国土調査法第II座標系(北緯33° 00' 00" 東経131° 00' 00")を基準に基準点(No1~No23)を設定し、これを基に実測図を作成することにした。

基準点の配点図と座標は第18図、第2表の通りである。

点名	X	Y	H
No1	+ 32.448.99	- 42.823.93	29.959 ^a
No2	+ 32.401.97	- 42.775.51	31.195
No3	+ 32.748.90	- 42.770.32	27.536
No4	+ 32.923.78	- 42.771.88	27.268
No5	+ 32.844.22	- 42.796.36	27.236
No6	+ 32.839.95	- 42.718.28	28.227
No7	+ 32.818.05	- 42.778.53	27.579
No8	+ 32.769.45	- 42.718.02	27.986
No9	+ 32.749.31	- 42.741.49	27.469
No10	+ 32.734.53	- 42.732.16	27.878
No11	+ 32.727.91	- 42.675.77	29.026
No12	+ 32.703.85	- 42.779.43	27.111
No13	+ 32.646.41	- 42.816.61	27.047
No14	+ 32.609.82	- 42.679.14	28.522
No15	+ 32.567.52	- 42.923.69	27.899
No16	+ 32.590.33	- 42.825.80	28.180
No17	+ 32.539.18	- 42.831.95	28.572
No18	+ 32.476.82	- 42.687.58	30.721
No19	+ 32.466.33	- 42.932.28	28.278
No20	+ 32.454.38	- 42.846.40	29.721
No21	+ 32.362.10	- 42.690.28	32.391
No22	+ 32.334.29	- 42.809.35	29.721
No23	+ 32.349.00	- 42.927.15	28.571

第2表 基準点成果表



第18图 筑後国分寺跡実測基準点配点图

圖 版



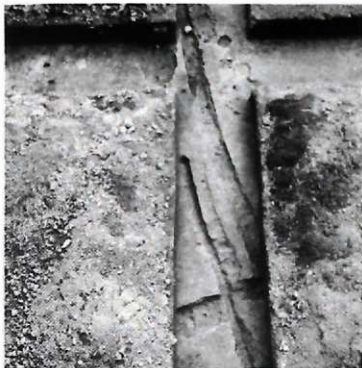
図版 1 第7次調査トレンチ全景 (西から)・(斜南東トレンチ (北から))





図版2 (上) 第8次調査区全景(北から)・(下) S K 129 土壇(北から)

図版3



第9次調査区全景（西から）



第10次調査
南トレンチ（西から）

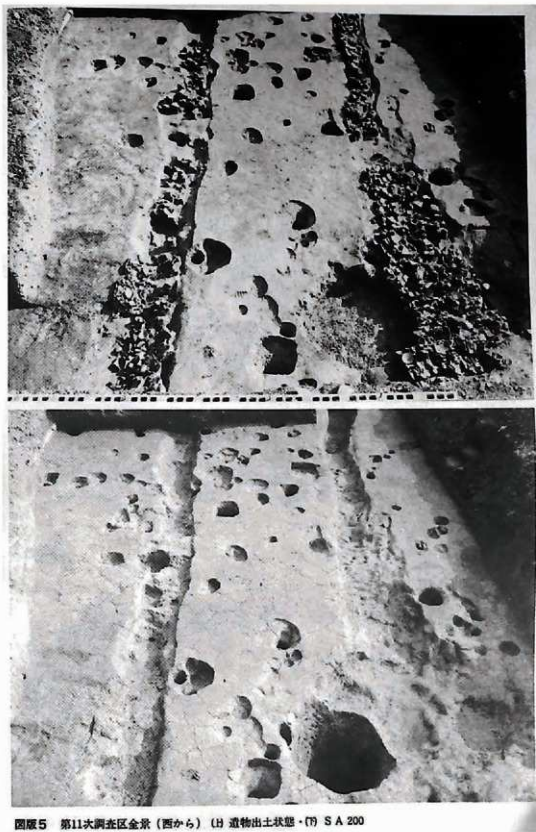
図版4 第10次調査
SD 170 溝



北トレンチ (南から)



南トレンチ
(南から)



図版5 第11次調査区全景(西から) (H) 遺物出土状態・(F) S A 200



圖版6 (上) S D 240 清 綠釉陶器出土狀態・(下) S D 255 清 軒平瓦出土狀態



図版 7 第15次調査 S B 035 講堂跡 (A) 南から・(B) 東から

図版8

S B 270 掘立柱建物跡



南側掘立柱跡
(南から)



図版9 (b) 掘立柱一南・(c) 掘立柱一北

筑後国分寺跡 (Ⅱ)

昭和 55 年 3 月 31 日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印刷 (有) 猪飼プリント
久留米市東和町6-18